

## メッセージアウトライン

ルカの福音書 2:1 ~ 20

「それが、あなたがたのためのしるしです」

[1-20]「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上つて行った。身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。御使いは彼らに言った『恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。』

すると突然、その御使いと一緒におびただしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。『いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。』

御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。『さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。』

そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当たった。それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。しかしマリアは、これらのことすべて心に納めて、思いを巡らしていた。羊飼いたち

は、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」

クリスマスとは何の日なのか。世の中ではクリスマツリーを飾ったり、木々をイルミネーションできれいに飾ったり、プレゼントをもらったり、ご馳走を食べたりする。しかし、本当のクリスマスとは神様が私たちに送ってくださった救い主のご降誕をお祝いする日なのである。

ベツレヘムの家畜小屋で男の子が生まれた。住民登録のため多くの人々がそれぞれ先祖の出身地の町へ帰って登録することがローマ政府から義務づけられていた。ヨセフとマリアの先祖ダビデの出身地であるベツレヘムの宿屋はどこも超満員で二人がやっと見つけたのはある人の家畜小屋であった。そしてそこでマリアは月が満ちて男子の初子を出産したのである。現代でも妊婦が病院へ行く途中で産気づいてタクシーの中で出産したなどというニュースを聞くことがしばしばある。

しかしこのマリアの場合は特別であった。彼女はヨセフとは法律上は夫婦となっていたが、まだ正式に結婚生活には入っておらず、その胎の子は聖靈によって身ごもったのであった。→ルカ 1：26~38　　そしてこの子こそ旧約聖書の時代から預言され、待ち望まれていた救い主イエス・キリストであった。

この時、野原では羊飼いたちが夜番をしながら羊たちを見守っていた。これは盜賊や野獣から羊を守るためであった。イスラエル人は先祖アブラハムの時代から羊を飼うことを生業としていたが、時代が進んで様々な職業に就くようになり、当時は羊飼いといえば社会の底辺の人々が就く職業となっていた。

しかしその羊飼いたちにこそ、まず第一に救い主誕生の喜びの知らせが主の使い(御使い、天使)によって告げられたのであった。王や権力者、金持ちなどにではなかった。当時のユダヤを治めていたヘロデ大王などは後に救い主誕生のニュースを聞いた時、自分の地位を脅かす者が出て来たとして救い主を抹殺しようとした。→マタイ 2：1~16

主の使いは「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです」と告げた。

この場合の「しるし」とは救い主のお生まれになった場所を知る手掛かりとしてとしてのしるしであろうか。実際、羊飼いたちは主の使いから聞いたそのしるしを目当てにして家畜小屋でお生まれになったキリストを捜し当てた。そしてその赤ん坊は布にくるまれて、飼葉桶に寝ている。それは確かに他の赤ん坊にはないしるしであった。

さて、ではそれから約二千年後の現在、私たちは救い主が家畜小屋でお生まれになったことをすでに知っており、この幼子が布にくるまれて飼葉桶に寝かされていたことも知っている。

すでに救い主降誕の映画を初めから終わりまで見ていた観客のようにである。

しかし今、クリスマスの礼拝に集まっているそのような私たちに、この聖書のみことばが「それが、あなたがたのためのしるしです」と語りかけてくるとき、そのしるしとは、もはや布と飼葉桶ではなく、それとは別のものを指していると考えられる。私たち信仰者ももはや観客のようであってはならない。ではそのしるしとは私たちにとって何か。それは救い主としてこの世に来られた幼子そのもの、つまりイエス・キリストこそが私たちに与えられたしるしであると言える。ではこのイエスは私たちにとって何のためのしるしなのか。

それは要約すれば神がこの世界を決して見捨てておられないことのしるしであり、この世に対する神の愛を証明するしるしなのである。

このイエスから目を離さないようにすることが、神の愛を知り、実感するために極めて重要なこととなる。このイエスに目を向ける、すなわち心を向けることがおろそかになると、私たちは神の愛を見失い、誤解する危険性が出てくる。この一年、健康が守られた。病気になったけれども回復できた。仕事も続けることができ、経済的にも支えられた。家族も守られている……。それを感謝することは良いことであり幸いなことである。しかし、健康や仕事が守られる、物事がうまく順調に進むということは、神の愛を証明するしるしの役目を果たすことは

できないし、それらをしてしまうと、かえって神の愛を見失うという危険性が出てくることを覚えておかなければならない。→ヨブ記参照

最近でも大きな地震が立て続けに起こり、津波や火事その他さまざまな自然灾害により多くの命が失われ、住まいや仕事も失われている。人の愛が冷え、人の命を何とも思わない凶悪な事件も頻発している。こうしたことは私たちの周囲でも起こりうることである。

そういうことが実際に私たちに起こったときに、私たちに対する神の愛は無になってしまふのであろうか。そうではない。そのようなときにこそ私たちは本日の聖書のみことばが告げている、私たちに与えられているしを思い起こさなければならない。

つらく悲しい出来事があっても、私たちは神に見捨てられたわけではない。神の愛は変わっていない。神がそのひとり子イエスをこの世にお送りくださった以上、それは間違ひのない確かなことなのだと。→ヨハネ 3：16

この家畜小屋で生まれ飼葉桶に寝かされた幼子イエスはやがて成人すると弟子たちを伴って神の救いの福音を宣べ伝えるために各地を巡られた。そして大勢の病に苦しむ人を癒され、悪霊につかれた人々も癒された。これは、神は病める者を心にかけられ、神に顧みられない病はないことを証明するしとなつた。またイエスは遊女や取税人の友となり、罪人たちとともに食事をされた。そうしたイエスの振る舞いは、過ちを犯し、罪の誘惑に弱い私たち人間に対する神の深い愛と憐れみをあらわすしとなつた。

そして決定的な神の愛を示すしとなつたのは、イエスが十字架にかかるることによってであった。これはもはやしるしではなく、神の愛そのものと言うべきである。神によって造られ、いのちを与えられ、生かされている私たち人間は神を無視し、自分勝手に生きている。神は私たちを愛してくださっているが、また聖いお方であるので、罪ある人間をそのままで受け入れることはできない。この世の人々の中で心に一つも汚れがなく、愛にあふれている人がいるだろうか。残念ながら神にそのまま受け入れていただくほどの聖く、罪がない人はいない。→ローマ 3：10～12 それゆえ聖い神と罪ある人間との間に立つ罪のないお方が必要なのである。

そしてそのお方こそ神の御子イエス・キリストなのである。イエスは私たちのために、私たちが受けるべき神のさばきを代わりに受けて、いのちを捨ててくださった。その十字架上でイエスはご自分を十字架につけた者たちのために祈られた。それは広い意味では神を知らず、神に敵対するこの世のすべての者たちを意味する。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」（ルカ 23：34）

このようなとりなしを十字架上でなされたイエス・キリストから目をそらしてしまうと。神の赦しが無限であることを見失ってしまう。そして神の赦しを、驚くばかりの恵みとは言えないもの、人が誰かを赦すときのその赦しと大して変わらないものにしてしまうのである。

そうなってしまわないように聖書は、私たち人間の罪を贖うためにこの世に人となって来られたイエス・キリストを指し示しながら、「それが、あなたがたのためのしるしです」と私たちに告げているのである。